

ほっかいどう N I E 通信

Newspaper in Education



発行 北海道 NIE 推進協議会

〒060-8711 札幌市中央区大通西3丁目6 北海道新聞社内 ☎011-210-5802 FAX011-210-5826

北海道新聞 NIE ホームページ (<https://nie.hokkaido-np.co.jp/>) でバックナンバーから閲覧できます

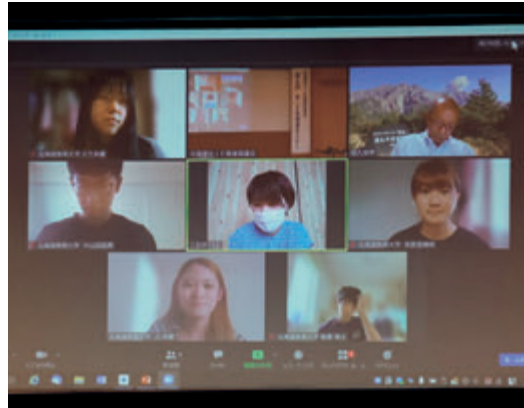
北海道 NIE 推進協議会(菊池安吉会長)が主催する NIE 北海道セミナーは今年で6回目。2020年は新型コロナウイルス感染症の拡大で中止となり、21年は NIE 全国大会札幌大会があつて実施されなかった。今回は8月10日に本部の北海道新聞本社から配信し、道内外の教育関係者や

道教大旭川校の学生らが参加した。パネリストは、日本新聞協会認定 NIE アドバイザの志田淳哉さん(札幌南高教務主任)、元アドバイザの福沢秀さん(旭川市立明星中学校長)、同じく中原英雄さん(釧路市立清明小学校長)の3人が務めた。NIE の効果については

NIE 北海道セミナーが3年ぶりにオンラインで開かれた。長く NIE に取り組んできた教師3人が、初めに「私と NIE」について語ったのに続いて「新しい学びを創る NIE」をテーマにパネル討論をし、NIE の新たな可能性について語り合った。さらに参加者約60人が小グループに分かれて意見交換を行い、各地での取り組みを紹介し合った。

(2、3面にパネル討論詳報)

北海道セミナー



オンライン参加の教員や大学生を交え、新聞を活用した授業の進め方について意見を交わした NIE 北海道セミナー

新しい学び可能性探る

3年ぶり開催 3氏がパネル討論

「ゲームの話ばかりしていた小学生の情報感度が、新聞を継続して読ませることで良くなり、社会のことに反応するようになった」「家庭学習で記事の切り抜きをさせたなら親子の会話が生まれた」といった報告があった。また「タブレット

端末を活用した NIE の実践事例を増やすことが課題だ」とする指摘もあった。提言では「不登校、いじめなどに苦しむ子に良いヒントになる記事がある。NIE を生活指導に活用できないか」「教育現場で避けて通れない情報リテラシーから入ると NIE に取り組みやすい」などの指摘があった。続くグループごとの討論では、授業開始前の「朝の会」の時間を活用して記事に関する意見交換を行っていったことなどの実践例が報告された。

第27回全国大会は宮崎で

1100人参加

3年ぶりに対面形式に戻った第27回 NIE 全国大会が、宮崎市で2日間にわたって開かれた。昨年の札幌・一昨年の東京大会は新型コロナウイルス対策でオンライン開催だったが、今年は新聞・教育関係者ら約1100人が、パネル討論と13分科会の公開授業や実践発表に足を運んだ。大会の一部は12月31日まで、NIE 全国大会宮崎大会のホームページで無料配信されている。



「いまを開き 未来を拓く」をスローガンに日本新聞協会が主催。8月4日の全体会では、宮崎県 NIE 教育推進委員会の田上幸雅委員長が基調提案で新聞を日常的に開くことで「子どもたちが未来を切りひらいていく力になる」と話した。パネル討論には、宮崎西高付属中の木幡佳子教諭ら5氏が参加。木幡教諭は同校の生徒全員が、社会科の週末の課題として記事スクラップに取り組み活動について語った。同校を卒業した高校1年の高村心花さん

は「記事に対する自分の意見も書けるようになり、社会の動きにも関心を持つようになった」と話す。木幡教諭は「週末に学校行事があれば、スクラップを休みにするなど柔軟に対応し、頑張らないことが大切」と指摘した。日本新聞協会 NIE コーディネーターの関口修司氏は「新聞の文章は説明的で実用的だ。多くの図表や写真も使われており、論理的に文章を読み取って考える力を養える」と新聞の有用性を強調した。続いてリチウムイオン電池の開発でノーベル賞を受賞した吉野彰氏が講演で若者に希望を託すメッセージを述べた。

NIE北海道セミナーでは初めに「私とNIE」この25年」をテーマに志田さん、福沢さん、中原さんの順に発表。NIEとの出会いや実践を通して学んだことなどを語った。

私とNIE



学校行事と絡め 壁新聞など作成

志田さん

教員になって28年。教科は地歴公民です。教員の言動は良くも悪くも児童生徒の人生に大きな影響を与えます。子どもたちに良い意味での光を与えられると思います。日々の仕事をしてい

ます。NIEとの出会いは教員

になってからです。当時から多くの先生が授業で新聞を使っていた。いろいろな社説を比較して読む複数の視点、1日、1週間、1カ月たつて同じ新聞記事を読む時間の視点、英字新聞やその他の新聞を使い、ある事柄を他国ではどう伝えているのかを読む空間の視点の三つの視点を教えてきました。

NIEで意識していることは学校行事と結びつけること。授業で行うのは当たり前なので、例えば見学旅行や宿泊研修ではがき新聞や壁新聞などを作成します。もう一つは一部の先生だけで負担をしないことです。どうしても国語や社会科の先生が中心となります。昨夏のNIE全国大会札幌大会で公開授業を行いました。その時は体育や数学の教員も巻き込みました。こうして二十数年間、多くの仲間を作ってきました。

記事の利用通じ

授業の見直しも

福沢さん

社会科担当として、公民を中心に自分が興味を持つた新聞記事を学習内容に合わせた。授業で行うのは当たり前なので、例えば見学旅行や宿泊研修ではがき新聞や壁新聞などを作成します。もう一つは一部の先生だけで負担をしないことです。どうしても国語や社会科の先生が中心となります。昨夏のNIE全国大会札幌大会で公開授業を行いました。その時は体育や数学の教員も巻き込みました。こうして二十数年間、多くの仲間を作ってきました。

地域新聞作りで 若手教員に刺激

中原さん

2004年のアテネ五輪中、日々の新聞に載る日本人選手の活躍の記事を子どもたちと共有しました。授業自体で新聞は使わなかったのですが、その取り組みをNIEセミナーで発表することになり、そこで他校

の先生のNIEの実践例を学びました。新聞の子ども投稿欄を知って応募してみと、多くの作品が掲載され、子どもたちは非常に自信を深めました。それ以来18年間、NIEを続けセミナーに参加してきました。そこで感じたのは、NIE活動が1人の教員個人で終わったり、一つの教科に限られたりして広がりが課題になっていたこと。そこで教頭になった私は、若い先生に働きかけて地域新聞作りに取り組みました。さらにNIE実践指定校になって活動を記録、報告して評価されて表彰を受ける、先生方にも非常に喜んでもらえました。



札幌南高の志田淳哉教諭



旭川・明星中の福沢秀校長



釧路・清明小の中原英雄校長

主体的な学び 調べながら読んで

——新聞の活用は主体的な学びに効果がありますか。志田淳哉(以下志田) 教育現場は効率を求める雰囲気があり、生徒は楽に点数を取りたがる。ネットで検索すればすぐ解答やテクニクは出てくる。では、新聞を使う主体的な学びとは

何か。生涯学習のツールとして継続していくことが大切だと思います。そのためには「歴史家のように」新聞を読むことです。昨年、札幌で開かれたNIE全国大会で講演したノンフィクション作家の梯久美子氏が、歴史観を養う

ために新聞を活用するといふ提言をしました。世界の今を切り取るのが新聞。積み重ねると歴史として浮かび上がるとしました。記事の根拠、主張は何か、などを視点に読み込む。もう一つは新聞コラムの利用。調べながら読むと教

養が深まります。福沢秀(同福沢) 札幌のNIE全国大会では、札幌の中学の国語教諭が実践を公開しました。中学3年間に学んだ国語の学習内容が、新聞紙面にどのように使われているかを生徒が調べてテストを作り、級友に解いてもらう。主体的に学習を進めたことが想起できました。今後、小中高のNIE実践が体系化され

ば、子供たちの「主体的な学び」が広がります。さらにNIEの教育効果を教員間で共有したり、育てたい資質や能力とNIEを結びつけて学校の経営計画に明記することで、新聞の活用を学校の文化にすることができそうです。中原英雄(同中原) コロナ禍で休校になった際、学校の主体的な学びが問われました。小規模校の実践

ですが、地域を取材し作成した新聞を、地域の施設や郵便局で掲示してもらい見学者にコメントをもらいました。子どもの自信になりましたし、次への意欲につながりました。事実や意見など構成を学ぶこともできました。「まわしよみ新聞」を作る時は、子どもたちが記事を選んだ理由を話し合うと対話的な学びが成立します。

NIE生涯学び続ける力に

NIEの経験豊かな3氏によるパネル討論などが行われた北海道セミナー



情報通信技術（ICT）が普及し、新聞離れが進む中、NIEをどのようにに教育現場で続けていくのか。北海道NIE推進協議会の兼間昌智副会長が司会を務め、オンラインで開かれたNIE北海道セミナーのパネル討論には「新しい学びを創るNIE」をテーマに経験豊富な志田淳哉さん、福沢秀さんと中原英雄さんの3人が参加。NIEを生涯にわたり学び続ける原動力と位置づけ、持論を語った。

ICTの利用 先生への研修必要

——ICTとの関連で意見を聞かせてください。
志田 本校が購読する新聞5紙は、誰もが見ることが出来ます。ICTではデータベース（DB）が活用できますが、生徒全員が使

うことはできない。新たな費用が発生します。学校側には非常にネックです。教員の視点でICTを考えると、便利だから、集計が楽だからと、多くの取り組みがスタートします。生徒はその都度、端末に入力していく。だんだん、生徒との対面ではなく、画面と授業をするようになる。生徒が画面を見続けることが深い思考につながるのか、という意見もありました。

福沢 昨年度、NIEセミナーで旭川の高校の授業公開がありました。記事データベースを活用した3年生の探究学習で、タブレット端末しか使わなかった。記事を探して印刷して、配って子どもたちに感想を書かせて回収する。それ

を読み直して、コメントを入れて返却する。私がやってきた朝のNIEの実践方法です。それをタブレットでやれば検索記事を共用し、子どもたちはタブレットで読む。感想はすぐ集約できます。

中原 ICTの活用により、情報教育や情報を読み解くメディアリテラシーの資質を高める学習から、NIEに切り込むこともできます。

印象的な言葉を聞いたり読んだりすると、それが全てだと思いがち。メディアにはそれぞれ特徴があり、良さも危険性もあることを指導すべきです。DBを活用するなら先生方に対する研修も必要です。今の学校では、デジタルで作成した個人の記事を組み合わせて新聞を作り出した。これが共有できると、どの学年でも、どこでも見られるのでデジタルの新聞のよさを感じました。

5年後に向け

実践事例広く募る

——5年後に向けてのNIEの取り組みは。

志田 二つの視点を挙げたいと思います。一つは生徒指導の観点での活用が必要だということ。学校では、自主的な活動を通して生徒は社会性を学び、日常生活での自己管理能力と規範意識を育成する必要があります。学校教育の究極の目標は、より良い社会をつくるために子どもたちを育てること。そのために子どもたちが学び続けるきっかけとなるのがNIEだと考えます。

もう一つは良い記事を見込んで共有することです。いじめでつらい思いをしている、心が弱くなっているという子どもたちだけでなく、

く、つらい思いをしている大人にも、是非読んでほしいジャンルの記事がデータベース化され、それが共有できるとうれしい。良いコラムや書評とか。新聞の価値を再認識できます。

福沢 GIGAスクール構想を良い機会と捉え、タブレットを活用したNIEの実践事例を広く募っていただく必要があります。オンライン会議システムZoomを活用した交流や研修も継続してほしい。NIE活動の裾野を広げることができると。また、NIE推進協議会による地方での応援態勢づくりも大切です。

中原 家庭学習の一つとしてNIEに取り組むことも有効です。子どもが朝学



兼間昌智（かねま・まさとも）札幌市立西岡北中
や平岡中教員などを経て22年3月で札幌・もみじ台中校長を退職。現在は札幌大学講師として「日本語リテラシー」を担当している。北海道NIE推進協議会副会長、北海道NIE研究会会長。

NIE実践奮闘記

札幌市立栄南小学校教諭 上野 裕子

1人に1台の端末が導入され、子どもたちが自分の考えたことや調べたことなどをまとめて、表現する方法が大きく広がった。

中でも変化があったのは画像の取り扱いだ。子どもたちはインターネットで自分が使いたい画像を検索したり、必要な風景や場面を端末のカメラアプリで撮影したりできるようになった。画像を選ぶ自由度が高まったおかげで、子どもたちが自分の思いや考えを、より具体的に表現できる力が高まりつつあるように感じられる。

せっかく便利なツールがあるのだから、それを有効に活用できる能力を身に付けてほしい。どんな写真も

どのように活用すれば、もっと自分の言いたいことが相手に伝わるのかを考えられる子どもになってほしい。



そんな思いをもつて4年生の担任となった本年度、国語科「アップとルーズで伝える」に出会った。本教材は、見ている人に現場の

様子を伝えるメディアの表現方法である「アップ」(対象物にカメラを寄せて大きく映す)と「ルーズ」(対象物から距離を取って周囲の様子も映す)の長所と短所を対比的に説明しているものである。

この単元では「段落相互プ」と「ルーズ」を使い分ける実践力を身に付けることにもつながれると考えた。

本実践は、写真部分をマスキングした新聞記事を提示し、見出しなどからオリピック関連の記事であることを押さえる。それからマスキング部分に注目させて、国立競技場をアップとルーズで撮った二つの写真のうち、どちらが記事の写真にふさわしいかを考える。活動であることを伝える。個人で記事を読む時間を設け、それぞれが記事から

授業の終わりに、実際の記事ではどちらの写真が使われたかマスキングを外して見せると、自分の選んだ写真と同じだった子は喜びを表したが、「新聞記者さんは自分の伝えたい事に合わせた写真の撮り方をしていることを学べたね。みんなも写真を撮るときに理由をもってアップとルーズを意識できるといいね」と自分のこれからの学習に生かすことを強調した。

記事内容強調する写真／選んだ理由読み取り交流

の関係に着目しながら『考えとそれを支える理由や事例との関係などについて』叙述を基に捉えることができる「ことなどを目標としているが、この説明文で文章の構造を学ぶだけではなく、子どもたちが実際にさまざまな学習の中で「アップ

読み取ったことを元に写真を選び、理由をワークシートに記入する。選んだ写真や、その理由を交流し、新聞記者や本などの著者には、伝えたいことを補足したり強調したりするために根拠や理由をもって写真も選んでいることを実感でき

ときには「建物の歴史を伝えたいから、全体が写るルーズの写真がいいな」と、学びが生かされている様子が見られた。国語での学習が、新聞を使った発展学習を経て、他教科へとつながっていく広がりが実感できた。



NIE活動に関する論考や資料などをまとめて北海道NIE推進協議会が発行した記念誌「北海道NIE 25年のあゆみ」

25周年記念誌発行 10周年以来2冊目、全道に配布

北海道NIE推進協議会は、1996年の発足からこれまでの取り組みを振り返り、資料などをまとめた「北海道NIE 25年のあゆみ」を発行した。

菊池安吉会長は「NIEは、どこでもできる」と題し、重要性を増すNIE活動の意義を強調。「情報の確かさを考慮せず、デマに振り回されがちな児童生徒にメディアリテラシーを身につけさせ、批判的な思考

を育てる必要がある」と指摘している。このほか、学校現場で実践してきた教員や元校長ら約30人が「NIEにおける教材づくりの工夫」「アイヌ関連教育とNIE」「記事データベースを活用したNIE」など、具体的な授業方法の工夫や教育効果などに関する論考を寄せた。記念誌は道内全179市町村の教育委員会や過去3年

間のNIE実践指定校などに贈られた。同協議会は96年6月、道内の新聞8社と教育関係者が参加して発足した。現在の加盟報道機関は13社となっている。A4判96ページで、記念誌発行は2005年5月の「北海道NIE 10年のあゆみ」以来、17年ぶり2冊目。問い合わせは同協議会事務局、電話011・210・5802へ。

礼文小で離島初のセミナー



礼文小の複式学級で加藤教諭が公開した道徳の授業

公開授業と同時に配信

激減。21年度は全7回のセミナーがオンライン開催だった。参加者は事前収録した公開授業をセミナー当日に視聴し、実践発表は各地の教諭がオンラインで配信して意見交換した。

コロナ禍対策として始まったオンライン開催だが、離島だけでなく、都市部から遠く離れた小規模校でもセミナーを開催しやすくなる。その結果、全道の教員が多様なNIEの実践を学ぶことができるメリッ

トは大きい。道教大旭川校に限らず、各地の教員志望の学生も参加できる。来年

オンラインでハンディ克服 山田教諭

礼文小でのセミナーについて、離島の学校で勤務した経験のある日本新聞協会NIEアドバイザー山田耕平さん(札幌市立篠路西中学校教諭)に授業の意義などを語ってもらった。

今回の公開授業は「よりよい学校生活」に関する考えを深める複式学級の道徳の授業。同じ時間に複数の学年を交互に指導する「わ

度から、併用型での地区セミナー開催が増えていく見通しだ。

数のため相互交流の相手限定され、学習の場面で面的に考えながら議論することが難しい。しかし、現在は新聞社のデータベースの活用や電子版の普及などで時間や場所のハンディキヤップを乗り越え、「個別最適な学び」につなげるのが可能になっています。そのため、教科書で知識・技能を習得し、身近な情報満載の新聞を「地域の出来事」「発展的教材」として「問い返し」の場面などで扱って、問題解決型学習を充実させることができるのではないだろうか。

本年度地区セミナーは、札幌と苫小牧でも開催され、教員や道教大旭川校の学生ら計約70人がZOOMを使ったオンラインでの研究討議にも参加してNIEへの理解を深めた。

思いやりの心 考える機会に

札幌セミナー



NIE第6回札幌地区セミナーは8月23日、札幌市中央区の北海道新聞社NIEプラザと各地をオンライン

ンで結んで開かれ、小中学校教諭らが事前収録した授業の公開や活用例の実践発表が行われた。

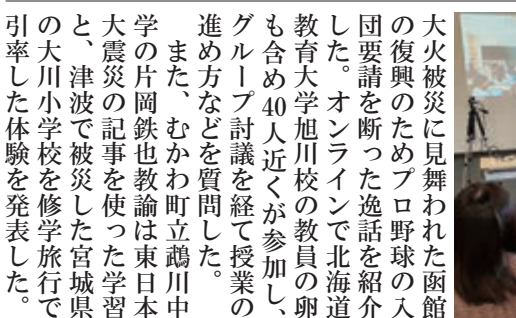
札幌市立藤野小の高橋周教諭は、6年生の道徳の授業の様子を動画で紹介し写真Ⅱ。市電で無料貸し出しされる傘の約5割が返却されないことを伝えた記事を書いた児童たちが議論。「返さない人が悪い」「有料にすればいい」などの意見が出た。授業を振り返って高橋教諭は「児童が他者への思いやりなどを考えるきっかけになった」と話した。

セミナーでは参加者から「教科書に載っていない情報を補えるのが新聞の利点」とする声や「複数の記

事を使うといい」「記事データベースで調べ物をさせては」などとする指摘も出ていた。

逸話など紹介 郷土愛に焦点

日胆セミナー



第16回日胆地区セミナーでは、苫小牧市立ウトナイ中の田倉有紀教諭が、道徳の授業「郷土のために生きる」で新聞を使い3年生の学びに役立てた。

事前収録された授業が11月4日、北海道新聞苫小牧支社からオンライン配信されたⅡ写真Ⅱ。田倉教諭は苫小牧の中学生が海岸で清掃活動した記事で郷土愛に焦点を当てた。深掘りする教材には青森県出身の野球選手久慈次郎さんを取り上げ昭和初期、

宗谷管内礼文町の礼文小で開かれたNIE第7回宗谷セミナー(北海道NIE推進協議会主催)は、地区セミナーとして初めて、生の公開授業をオンラインで同時配信する併用型(ハイブリッド)で行われた。離島での地区セミナーも初開催で、同町内の船泊小、香深中教員らも授業参観し臨場感を体験。オンライン参加を含む教員ら約60人は、授業への質疑応答を通じて参加意識も高めた。今後、多くの教員がNIEを学び、実践していくには併用型セミナーが効果を発揮しそうだ。

セミナーが開かれた9月7日の公開授業は、道教大旭川校の学生時代にNIEの実習を積んだ加藤育海教諭が担当。3、4年生の複式学級(児童計11人)で道徳の授業を披露した。友達

と仲良くする心がけについて、小中高生投稿欄に掲載された小学4年生の記事を題材として、礼文小児童は楽しい学校生活を送るには何が大切かを考えた。

授業参観した船泊小の川岸未来教諭は「自分も複式授業をやっているので勉強になった。オンライン開催は離島の教員には大変ありがたい」と感想を述べた。今回は多くの道教大旭川校生も参加した。礼文小の八重樫裕希教諭は「学生に離島の授業を見てもらえて良かった」と振り返った。

道内でのセミナーは、開催地に集まった教員らが公開授業を参観して研究討議を行い、実践発表も聞く形で2000年度から開かれてきた。19年度までは年間10回ほどの開催だったが、コロナ禍で20年度は2回に

また、むかわ町立鶴川中学の片岡鉄也教諭は東日本大震災の記事を使った学習と、津波で被災した宮城県の大川小学校を修学旅行で引率した体験を発表した。

高校生記者に接して



商店街で取材する高校生＝2021年5月

地域の課題取材財産に

苦小牧民報社執行役員編集局長 酒井 昭

新聞離れが言われて久しい。活字離れではなく、新聞が読まれなくなっている。むしろ、若い世代はスマートフォンであらゆる情報を得ており、活字には日常的に触れているのだらう。どうも新聞だけが、肩身が狭い。

そんな若い世代を代表する高校生の新聞部が年に1回集まる地域の研究大会で講師を2年連続で務めた。生徒間の交流が目的の一つだが、新聞への理解を深める役割も担っている。ただ、新聞部に所属しているからといって必ずしも新聞にどっぷりつかっているとは限らない。日常的に新聞を讀

んでいるのは、むしろ少ないのが現実だった。生徒たちの活動は定期的な新聞の発行だ。学校によって中身に差異はあるものの、月に1回必ず発行している学校もある。研究大会ではこの「発行」することの意義も強調した。弊社は2018年9月の胆振東部地震で、あの規模模停電(ブラックアウト)の中で「紙齢を絶やさない」ことに精力を傾け、ページ数は少ないながらも当日発行にこぎつけた。販売店も全面協力し、暗闇の中を配達に奔走した。懐中電灯を照らしながら新聞を読んだという読者の声に感激し、改めて新聞

原稿書きには悪戦苦闘したようだ。書き出しに戸惑いながら、取材で体験した感動を記事に。短時間で作業に、必ずしも十分な成果は得られなくても、新米記者としての経験は貴重であつたに違いない。

22年は新聞の中で重要な役割を果たす「見出し」の付け方に重点を置いて、仮想の原稿や童話に対して、適切な見出しを付けてもらう試みだ。4、5人をつづのグループに分け、そのグループで原稿を要約した見出しを考えてもらった。同じ原稿でも捉え方によって、見出しが変わることや本職の整理記者でも悩ましい10文字前後で見出しを考えることを伝え、いざスタート。生徒たちは感性豊かに見出しを選択。新聞でも十分に使える表現もあり、その柔軟性に驚かされた。

研究大会では、新聞製作を通して技術的な習得のほか、取材で地域の現状や課題を実感できたことも財産の一つになったのではないかとと思う。高校生が地域に入る機会がそう多いとは思えないからだ。「新聞」を讀んで学ぶことも大切だが、実際に地域の人と触れ合い、話を聞くことでその実情を理解できる。新聞をつくるという角度から、若い世代が新聞の役割を実感できた貴重な時間であつたと認識してもらえれば、伝えた側として意義があつた。

リレーエッセー
多紙彩々

の意義を認識させられた。こうした経験談も含めて生徒たちには「新聞とは何か」から説明をスタート。21年は実際に取材をして、最終的に1枚の新聞を製作するスケジュール。結論から書くという新聞特有の原稿の書き方や写真撮影のボ

22年は新聞の中で重要な役割を果たす「見出し」の付け方に重点を置いて、仮想の原稿や童話に対して、適切な見出しを付けてもらう試みだ。4、5人をつづのグループに分け、そのグループで原稿を要約した見出しを考えてもらった。同じ原稿でも捉え方によって、見出しが変わることや本職の整理記者でも悩ましい10文字前後で見出しを考えることを伝え、いざスタート。生徒たちは感性豊かに見出しを選択。新聞でも十分に使える表現もあり、その柔軟性に驚かされた。

北海道から札幌市立発寒南小の朝倉一民教頭、推進協議会の杉本和弘事務局長が出席した。まず各推進協

東北ブロック会議
各社が意見交換

日本新聞協会主催の北海道・東北ブロックNIEアドバイザー・NIE推進協議会事務局長会議が9月17日、仙台市の河北新報社で開催されたII写真II。北海道と東北6県のアドバイザーら約30人が各地でのNIE活動の課題などを話し合っ

議会議務局長がそれぞれの取り組みと課題、展望などを報告。北海道からは、離島の礼文小で初開催した道内地区セミナーの様子のほか、オンラインシステム利用により各セミナー参加者が増えている状況などを説明した。各協議会から、事務局の人手不足や学校で急速に進むデジタル化への対応などの発言が相次いだ。続いて参加者全員が3グループに分かれ意見交換。「新聞を購読する家庭が減り、子どもたちが接する機会が少ない」「学校の中にNIEのキーパーソンとなる先生が必要」「データベイスを活用した授業が進むが、まず検索ワードを自分で考える力」などの意見が出ていた。日本新聞協会NIEコーディネーターの関口修司さんは「子どもたちの読む力が下がってきており授業だけでなく、朝学習などで日常的に新聞にNIEを」と呼びかけた。

編集後記

〇…礼文小学校で開かれた9月7日の宗谷地区セミナーは、5面の記事の通り離島で初の試みだった。その難しさと離島での暮らしの大変さを思い知らされたのが、北海道付近で前日の6日夜に温帯低気圧に変わった台風11号だ。セミナーの司会を務める北海道NIE推進協議会コーディネーターは、日本海を北上してくる台風の動きを警戒し、予定を早めて5日にはフェリーで礼文島に到着。一方、事務局の筆者は6日午前中に稚内まで行ったものの、午後からフェリーは欠航。7日も終日欠航となって出席できなかった。公開授業のオンライン生配信や、参加者のZOOMでの意見交換の準備は整っていたのでセミナーは無事終了。その便利さを再認識したセミナーだった。(福)